

歴史の中からみる、医系技官の歴史

# 伝説の医系技官

本コラムでは、明治時代に医師かつ行政官として活躍した、長與專齋と後藤新平をご紹介します。  
長與專齋は、初代の内務省衛生局長として、後藤新平は、二代目の衛生局長として、  
それぞれ明治日本の公衆衛生の向上に寄与した、我々医系技官の大先輩です。



## 長與 專齋 1838(天保9)～1902(明治35)

### 「衛生」の名付け親

長與專齋は、1838(天保9)年に肥前国大村藩(現長崎県)で藩医の家に生まれました。1854(安政元)年、16歳で大坂の適塾に入門し、のちに福沢諭吉の後任として、塾頭となりました。その後、1860(万延元)年、22歳で長崎に赴き、ポンペについて蘭医学を学び、1871(明治4)年には、33歳で上京し、文部少丞となり岩倉遣欧使節団に随行して渡欧、西欧の医学教育を視察・調査しました。

1873(明治6)年に帰国後、文部省医務局長となり、1875(明治8)年に医務局の内務省への移管に伴い、衛生局の初代局長となりました。日本には当時「衛生」という語がなく、長與が考案したとされています。衛生局は、後に社会局とともに内務省から分離し、厚生省となりました。長與の局長在任は19年にわたり、司薬場の建設、医制の制定、防疫・検疫制度の導入など、わが国衛生行政の基礎を築きました。晩年は、元老院議員、貴族院議員などを歴任しています。

## 後藤 新平 1857(安政4)～1929(昭和4)

### 百年先を見通した男

後藤新平は、1857(安政4)年に胆沢郡塩竈村(現岩手県奥州市)水沢藩士の家に生まれました。須賀川医学校(福島県立医科大学の前身)を卒業し、1881(明治14)年、24歳で愛知県病院長兼愛知医学校長となりましたが、長與に認められ、1883(明治16)年に内務省衛生局に入り、ドイツ留学をへて1892(明治25)年に衛生局長に昇進しました。1898(明治31)年には児玉源太郎台湾総督により民政局長に抜擢、のち民政長官となりました。

1903(明治36)年、貴族院議員に勅選され、第2次、第3次桂内閣で通相、鉄道院総裁、寺内内閣では内相、外相等を歴任し、シベリア出兵を推進しました。1920(大正9)年に東京市長となり、第2次山本内閣内相兼帝都復興院総裁として、大震災後の東京復興計画を立案しました。また、ソ連との国交樹立にも関与しました。

亡くなる際に、「金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。」という言葉を残したとされています。

(資料:「近代日本人の肖像」国立国会図書館、「後藤新平ゆかりの人々」後藤新平資料館 他)

